

あの頃の風景

おくのほそ道 第8回

芭蕉の辻 「仙台」

いであ株式会社 / 建設統括本部水圏事業部 / 河川部
松田明浩 MATSUDA Akihiro (会誌編集専門委員)



① 往時の芭蕉の辻 (芭蕉の辻に立つ石碑にあるレリーフ)

仙台市街を東西に走る目抜き通りの青葉通りから国分町通りを一本入ってほどなく、「芭蕉の辻」という十字路がある。この名称の由来は定かでないが、かつてここに芭蕉樹があったためとか、繁華な場所であったがゆえの「場所の辻」の訛ったものとか、「芭蕉」という虚無僧が近くに住んでいたからとか、諸説が伝えられている。

「芭蕉の辻」は、古くは「札の辻」とも呼ばれていた場所で、江戸時代から仙台城の城下町の町割の基点とされていた。南北に奥州街道（現在の国分町通り）、東西は広瀬川を渡り仙台城大手門へまっすぐ続く大町通りとなっており、まさに城下の中心であった。辻には立て札が掲げられたため当時は「札の辻」が正式名称であった。

辻に面した建物は仙台藩がその威光を、街道を行き交う人々に示すために、四つ角全てが城郭風の高楼を備えた同じ形状となっていた。辻を中心に藩の御用商

人が軒を連ね、藩の両替所が設けられるなど、仙台城下町の経済の中核として機能していたという。

当時仙台で活躍していた俳人の大淀三千風は、1682（天和2）年発刊の『松島眺望集』で「芭蕉の辻にこぼれあまる宝の市」と「芭蕉の辻」のにぎわいを紹介していて、当時から仙台を代表する繁華街として、有名な場所であった。

時代が変わっても、明治から大正・昭和初期に至るまでこの地は仙台の中心であり続けた。仙台市の主要な卸売業、小売業、金融業などはこの界隈に集まっていた。しかし市街地のほとんどが米軍の爆撃によって焼失し、戦後に復興道路として大幅員の「青葉通り」や「広瀬通り」、仙台駅周辺の開発や国道4号バイパスが仙台駅東方にできることなどにより、高層ビルなどがこれら大通り沿いに建てられるようになった。そのため「芭蕉の辻」は次第に仙台を代表する町の中心から、そ



③ (上) 現在の芭蕉の辻。右の建物は日銀仙台支店、写真左側にも銀行や保険会社が立ち並ぶ。左下はこの辻に建つ奥州街道の道標と芭蕉の辻を示す石碑

② (左) 明治末の芭蕉の辻

⑤ (右) 戦災で焼失前の仙台城大手門。曾良の日記には仙台城内にある亀ヶ岡八幡宮へ参拝した記録がある

④ (下) 現在の仙台城大手門



の地位を周辺に譲り、大通りから一本入った路地の交差点のような趣となっていた。

現在、辻の傍らには、奥州街道道標と仙台の中心「芭蕉の辻」であったことを示す記念碑がひっそりと佇んでいる。周囲には日本銀行仙台支店や七十七銀行旧本店（現在は芭蕉の辻支店）が隣接し、ここが仙台の金融の中心であったことを今に伝える。しかし視野を広げると、辻の西側は仙台駅にかけて老舗デパートやアーケードが続く商業中心地で、北側に広がる国分町は、仙台どころか東北最大の歓楽街として全国に知られ、この辻が今なお江戸当初の町割り以来の仙台の中心地であることがわかる。

『おくのほそ道』の仙台の項で詠まれている冒頭の句は、芭蕉が仙台を発つときに旅の安全を願って贈られた、季節の菖蒲をあしらった風流な草履に感服した際のものといわれている。

同行した曾良の日記では名取川を経た後、長町の宿を

過ぎて若林川（広瀬川）をわたって仙台下へ入り、北上して夕暮れに国分町の旅籠に宿泊したと記されている。

芭蕉は奥州街道からこの「芭蕉の辻」に至り、国分町の宿で数泊した。そしてここを拠点に知人の消息を尋ねたり、仙台周辺の名所を訪れている。おそらく、その度にこの「芭蕉の辻」を往来したのであろう。

時期は端午の節句の頃。家々の軒先には鮮やかな菖蒲が飾られ、おくのほそ道ならぬ、にぎやかな往来となっている自分の俳号と同じ「芭蕉」の名を持つこの辻で、芭蕉は何を思ったのだろうか。時代に想いを馳せて交差点を眺めると、様々な人がそこを往来したことが目に浮かぶようである。

<参考文献>

- 1) 国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書『松尾芭蕉と仙台』梅津保一 平成26年1月 大崎八幡宮 仙台・江戸学実行委員会

<取材協力>

- 1) 仙台市戦災復興記念館
- 2) 仙台市博物館

<写真提供>

- ①、③、④ 松田明浩
- ②、⑤ 仙台市戦災復興記念館